

デザイン専攻 メディア研究領域

マツモト サト

松本 慧



ハリボテのうち

3Dプリント、PLA樹脂、PPシート/映像、3DCGアニメーション、モニター

ハリボテのうち

「ハリボテのうち」は、「リミナルスペース」をテーマに制作した作品である。リミナルスペースとは 2010 年代後半からインターネット上で流行し始めたミームであり、終わりの見えない長い廊下や、同じ建物が延々と並ぶ住宅街、外の見えない室内プール、薄暗い子供用のプレイルームといった場所に代表される。これらは全く異なる場所に思えるが、いずれも無人であることや、それを見たときに不気味さと不思議な懐かしさを覚える人が多いという点が共通している。

作者は数年前からノスタルジーや喪失感をテーマに作品を制作してきたが、そこに「不気味」という感情が混ざり合う表現に興味を持ち、本研究を始めた。

作者のリミナルスペースに対する解釈は、ある個人的な体験に基づいている。幼い頃よく遊んでいたドールハウスを久々に見かけた時、記憶より部屋数が少なく感じた。子供だった自分が空想によって実在しない部屋を作り出していたこと、現在はもうその部屋を見つけられないことに気づいた。そしてもしこの空想の空間が今、目の前に現れたら、それはリミナルスペースであると直感した。懐かしさや喜びを感じる一方で、本来戻ってくるはずのないものが現れたことによる不気味さや不信感が引き起こされる。この感覚は「死者の蘇り」に近い。強く望まれる出来事であると同時に、不吉で不穏な雰囲気を伴う。作者はこの体験から、リミナルスペースを、失われたはずの子供時代の蘇りだと解釈した。

本作品で低い展示台の上に配置されたドールハウスはかつての子供時代を、高い展示台に置かれたモニターは、大人になった現在を象徴する存在である。モニターに映るドールハウスは、デジタルの世界で子供時代が蘇った姿であり、作者の考えるリミナルスペースとして位置付けられる。また、この映像内のドールハウスは、実際のドールハウスと同じ形状である一方、サイズやテクスチャなどに異なる部分も見られる。こうした共通点と相違点の組み合わせによって、鑑賞者に既視感と違和感を同時に与えることを目指した。